

道真の詩における若干の表現について

妹尾昌典

本稿においては、道真の詩に關して、幾つかの注意すべき表現について、少しく論じることとする。引用した書証の中には、後世のものも含むが、それも理解の一助にはなると思つたからである。書証には、便宜上、私に返り点を施したり、場合によっては、訓読文の形で引くなど、体裁を若干変えて引いたもののあることを断つておく。

一

『菅家文章』卷二（岩波書店、日本古典文学大系）

△同諸才子、九月卅日、白菊叢邊命飲。同勸虚餘魚、各加小序。不過五十字。▽

仲秋翫月之遊、避家忌以長廢。九日吹花之飲、就公宴而未遑。蓋白菊孤叢、金風半夜。今之三字、近取諸身而巳云尔。

白菊生於我室虛。殘秋一夕又閑餘。

淺深淵醉花鰓下。取樂何求在藻魚。

ここで注意すべきは、右の詩の第三句の「淺深淵醉花鰓下」（淺く深く花の鰓の下に淵醉す）という表現である。

川口久雄氏は、「鰓」に「えら。魚が呼吸するところ。一句は、白菊の花のもとで、一同は、あるいは深酔いし、あるいは軽くほろ酔いになって、魚があぎとうように、酔っぱらってしまったの意。

「鰓」は、「淵」の縁語。」との注を施しておられる。「花鰓」とは形状の類似による見立てであらう。さらに付け加えると、「鰓」（鰓）と同音。「鰓」は「鰓」の俗字。）が「魚のえら」という原義以外で用いられる場合、以下に引く例のように、中国の詩において、そのほとんどが、女性（美女）の顔面の下部を表している。

『李賀歌詩編』卷三（商務印書館、四部叢刊初編集部）

△謝秀才有妾綺練、改從於人、秀才引留之不得、後生感憶、座人製詩嘲謝、賀復繼四首・其二▽

「鰓花弄暗粉、眼尾淚侵寒。」

『白居易詩抄本真跡』（黄永武著『敦煌的唐詩』洪範書店）

『時世粧』「時世流傳無遠近、顰不施朱面無粉」。

『白氏文集』卷四（藝文印書館、影印宋本）

『塩商婦』「飽食濃粧倚柁樓、兩朵紅顰花欲綻」。

『白氏文集』卷十二

『簡簡吟』「蘇家小女名簡簡、芙蓉花顰柳葉眼」。

『徐公釣磯文集』卷七（四部叢刊三編集部）

『追』和白舍人詠白牡丹『雪句豈須徵柳絮、粉腮應恨梅粧』。

帖梅粧」。

『徐公釣磯文集』卷七

『憶牡丹』「宋玉隣邊腰正嫩、文君機上錦初裁」。

以下は、後世（宋代）の例。

『和靖詩集』卷二（四部叢刊初編集部）

『杏花詩』「落雷枝梢向點乾、粉紅顰頰露春寒」。

『小山詞』（四部備要集部『宋六十名家詞』）

『鷓鴣天・其十一』「楚女腰肢、越女顰粉」。

『小山詞』

『浣溪沙・其十七』「顰粉月痕粧罷後、臉紅蓮艷酒醒前」。

『和清真詞』（四部備要集部『宋六十名家詞』）

『花犯荷花』「腰肢小腰痕嫩、更堪飄墜」。

おそらく、道真是、「花顰」の語を使用することによって、白菊

の花に美女の顔のイメージを重ねようとしたのであろう。

また、次に引いたように、魚が「傾浮（あぎと）ふ」さまを、人

が酔ったさまに見立てた先行例があることも、見逃せない。

『日本書記』卷八（岩波書店、日本古典文学大系）

『足仲彦天皇・仲哀天皇』二年六月

「故、其の處の魚、六月に至りて、常に傾浮ふこと酔へるが如し」。

以上のように、道真の詩は、先行例を自在に取り込んで駆使してあるので、複雑で幅広い表現となっている。

二

『菅家文章』卷四

『江上晚秋』

不_レ敢閑居任_レ意愁。勸身江畔立_二清秋_一。

山_レ銜_二落日_一分陰駐。水_レ趁_二凋年_一一種流。

鷗鳥從_二將天性_一狎。鱸魚妄被_二土風_一羞。

銷_レ憂自有_二平沙步_一。王_レ榮何煩獨上_二樓_一。八_レ仲宣賦云、暇日聊以銷_レ憂。

ここで注意すべきは、右の詩の第三句の「山銜落日分陰駐」（山

落日を銜んで分陰駐まる）という表現である。

從來、この句に関しては、川口久雄氏や金子彦二郎氏によって、

次に引く白居易の『高亭』詩の「好看落日斜銜處」の句、あるいは、

『庚樓曉望』詩の「竹霧曉籠銜嶺月」の句の影響であろうと

考えられてきた。

『白氏文集』卷十五（藝文印書館、影印宋本）

『高亭』「好看落日斜銜處、一片春風映半環」。

『白氏文集』卷十六

《庚樓曉望》「竹霧曉籠_二衡嶺月_一、蘋風暖送_二過江春_一」。

たしかに、白居易の詩は我が国の漢詩人に非常に好まれた。《庚樓曉望》詩の第三句の「竹霧曉籠衡嶺月」（竹霧は曉に嶺に衡める月を籠む）という表現一つを例にとってみても、次に引く詩文などに影響をあたえたとされている。

《本朝無題詩》卷六《池臺》藤原敦光（内外書籍、新校羣書類従）

「衡_レ峯月色浮_二盃酒_一、嶺_レ岸浪聲洗_二釣磯_一」。

《江吏部集》卷上・天部・雪（新校羣書類従）

《冬夜守_二庚申_一、同賦_二看山有_二小雪_一》。以_レ疎爲_二韻_一。

「衡_レ峯殘月孤輪半、觸_二石寒雲一臥餘」。

《新撰朗詠集》卷上（秋・七夕）（角川書店、新編国歌大観）

「泣計露珠_二叢底裏_一、愁望_二月鏡嶺西含_一。《牛女惜_二夜闌_一》以

言」

ところで、以上のような表現に注意が引かれるのは、漢詩文でも和文でも、山に沈む夕陽や月を表現する時に、「日」や「月」を主格にして、次のような表現をとるのが一般的だからであろう。

《玉臺新詠箋注》卷三・楊方（中華書局、中国古典文学基本叢書）

《合歡詩五首・其三》「白日入_二西山_一」。

《玉臺新詠箋注》卷五・何遜

《日夕望_二江、贈_二魚司馬_一》「團團日隱_二州_一」。

《新訂古事記》上つ巻、歌謡番号・三（角川書店、武田祐吉訳注）

「青山に日が隠らば、ぬばたまの夜は出でなむ」。

『新訓万葉集』卷十二（二九四〇番）（岩波書店、佐々木信綱編）

「出づる日の入る別知らぬ吾し苦しも」。

『平家物語』卷四《鶯》（岩波書店、新日本古典文学大系）

「弓はり月のいるにまかせて」

以上のように、「隠る」「入る」といった動詞を用いて表現するのが一般的であるのに対し、「衡む（含む）」という動詞を用いて表現してある点が異なっており、特に道真の《江上晚秋》詩の「山衡落日」の場合には、「山」が主格になっており、「日が山に入る」という通常の発想とは逆の表現形式をとっているからであろう。（この場合、おそらく、「衡」は「口に含む」といった意味であり、「今しも山に落日が沈みかかっている」さまを、逆に、「山が落日を飲み込みつつある」と見立てたものであろう。「衡」は元来は「馬の口に含ませる金具（くつばみ）」を意味する名詞であったが、「くつばみを口に含む」という意味で用いられるようになり、さらに一般的に「口に含む」という意味で使われるようになったもの。）

このように「山」や「嶺」を主格にして、それが「日」や「月」を「衡む（含む）」という表現形式が、果たして白居易の発想の詩に基づくものであるのか否かは、改めて考えてみる必要があるかと思われる。これに類似した表現で管見に入ったものでは、次のようなものがある。

《玉臺新詠箋注》卷七・簡文帝

《秋夜》「綠潭倒_二雲氣_一、青山衡_二月眉_一」。

『宋本樂府詩集』卷二十三・陳後主（世界書局、中国學術名著）

『關山月二首・其二』『帶樹還添桂、銜峰乍似弦』。

『初學記』卷五（地部上・石）隋・虞茂（中華書局、古香齋本）

『賦得詠石詩』『鏡峯含月魄、蓋嶺逼雲枝』。

『全唐詩』卷五五一・張祐（上海古籍出版社、影印揚集詩局本）

『題干越亭』『山銜落照歎紅蓋、水覺斜文捲綠羅』。

次は後世（宋代）の例。

『石門文字禪』（上海三聯書店、重印上海涵芬樓影印『宋詩鈔』）

『過致真翁』『南山任把浮雲蔽、西嶺猶將落日銜』。

以上に引いたものの中には、白居易以前の作品もあるので、必ずしも白居易独自の表現というわけではないと言える。

道真に白詩の影響が少なくないことは、改めて言うまでもないが、実は、道真の『江上晚秋』詩の『山銜落日分陰駐』の句に関しては、おそらく白詩の影響ではなからう。そのように考える根拠は、次に引くような詩があるからである。

『千載佳句』卷下（居處部・水樓）^{（注四）}五七六番

山銜落日溪光動。岸轉廻風檻影浮。王魯復『水樓』

すなわち、右の『山銜落日』という部分は、道真の句と完全に一致しているからである。王魯復については伝記が知られておらず、詩集も伝わっていない。此の詩も管見に入る限りでは、『千載佳句』および『全唐詩逸』に引かれるのみで、道真がいかにして此の詩を目にしたか不明なのが遺憾であるが、なにぶん古い時代のことゆえ、それもちたしかたない。とりあえず、現時点では、『千載佳句』を一証として、王魯復の詩を踏まえた表現としておくのが穏当であ

らう。

三

『菅家文章』巻五

『重陽節侍宴、同賦天淨識賓鴻、應製』

秋風拂拭易排虛、道路依稀晴稚羽初。

碧玉裝箏斜立柱、蒼苔色紙數行書。

時霜唯痛頻寒著、沙漠不知幾里餘。

賓雁莫教人意動、向前旅思欲何如。

ここで注意すべきは、右の詩の第三句の『碧玉裝箏斜立柱』（碧玉の装ひせる箏の斜に立てる柱）という表現である。

この句は空を飛ぶ「かり」を箏の「ことぢ」に見立てたものである。従来、此の句に関しては、川口久雄校注『菅家文章』、柿村重松著『倭漢朗詠集考證』（目黒書店）等の主要な注釈書類にも、中国側の詩との関係は説かれていないようであるが、管見に入ったものに次のようなものがある。

『千載佳句』卷下（宴喜部・箏）七六八番

飛鷹一行挑玉柱。十三絃上語嚶々。白『新艷發句云、雲鬟獨

押鉤蜻蜓、雪手輕柔玳瑁箏』

『白氏文集』卷三十一

『箏』『慢彈迴斷雁、急奏轉飛蓬』。

『唐人絕句萬首』卷四十三・張祐（鼎文書局、中国學術類編）

『聽箏』『十指纖纖玉筍紅、鷹行輕過翠絃中』。

『全唐詩』卷五一九・李遠

▲贈爭妓伍卿『座客滿筵都不語、一行哀鴈十三聲』。

次は後世（宋代）の例。

『小山詞』

▲菩薩蠻『當筵秋水慢、玉柱斜飛雁』。

以上のように、中国側の詩に道真の詩とは逆に筍の「ことぢ」を「かり」に見立てた例があるのは、すこぶる注目値する。

すなわち、唐詩における筍の「ことぢ」を「かり」に見立てる発想を逆転して、「かり」を「ことぢ」に見立てて表現した点に、道真の詩の面目があつたのではあるまいか。

そして、時代が下ると、次に引くように、「ことぢ」を「かり」に見立て、あるいは、「かり」を「ことぢ」に見立てるものが、和歌に多く見られるようになる。

『永久百首』六八二番（角川書店、新編国歌大観）^{（注五）}

▲雜三十首・筍▼仲実朝臣

空の色によそへることのことぢをば

つらなるかりとおもひけるかな

『久安百首』五二二番（新編国歌大観）

▲春二十首▼隆季朝臣

ひさかたのあまとぶかりのかへるさは

春のしらべにたつることぢか

『殷富門院大輔集』八番（新編国歌大観）

▲春のうたに▼

くもりなくなぎたるそらにあそぶいとに

琴ちをたててかへるかりがね

『殷富門院大輔集』二三三番（新編国歌大観）

かへるかりみたらしがはにうつるへば

みづのしらべのことぢなりけり

『長方集』一一番（新編国歌大観）

▲春・水上帰雁といふことを▼

引きつらねことぢをたてて帰る雁浪ぞしらべの声あはすなる

『俊成五社百首』三一三番（新編国歌大観）

▲住吉社百首和歌・春二十首・帰雁▼

春の空ことぢに見えて帰る雁松の風にぞ声かよふなる

『御室五十首』七七八番

▲秋十二首▼沙弥生蓮

秋風やしらべなるらん雁金のことぢをたててなき渡るかな

『夫木和歌抄』卷十二（秋・雁）四九五一番（新編国歌大観）

▲建保元年老若五十首歌合▼慈鎮和尚

たまづさのかきあはせたるしらべかな雁のことぢにみねの松風

『夫木和歌抄』卷三十二（琴）一五二〇二番

▲文応元年毎日一首中▼民部卿為家卿

みどりなる玉の緒ごのことぢかとみれば音する秋のかりがね

さらに時代が下ると、「ことぢ」と「かり」の見立ては、次のよう

うに新聞小説にまで登場するにいたる。

『晨鷄暮鐘廿四時』^{（注六）}

(壹) 《午前一時・心の月や法の水》

「空貫ぬきて横はり零ちをたてゝ啼過ぐる雁の羽衣漸寒み……」。

以上のように、「かり」と「ことち」との見立ては、唐詩にその先行例が見られ、それが道真の詩、あるいは、後世の和歌などに影響を与えたという過程をたどることができる。道真の《重陽節侍宴、同賦天淨識賓鴻、應製》詩は、その唐詩に於ける見立てを、いち早く取り入れた作品であると言えることができるであろう。

四

『菅家文章』巻五

《賦「雨夜紗燈」、應製。并序。于時九月十日。》

宮人入_レ夜、殿上舉_レ燈例也。于_レ時重陽後朝、宿雨秋夜、微光

隔_レ竹、疑_レ殘螢之在_レ叢。孤點籠_レ紗、迷_レ細月之揮_レ霧。臣等

五六人、奉_レ勅見_レ之。々々々不足。應_レ製賦之云尔。謹序。

紗燈一點五更廻、不_レ要_レ寒鷄曉漏催。

晴誤_レ穿_レ雲星乍見、秋疑_レ冒_レ雨菊新開。

耳聞_レ落淚兼聞_レ曲、手勸_レ微心且勸_レ盃。

每憶_レ脂膏多_レ渥潤、那勝_レ恩澤繞_レ身來。

ここで注意すべきは、右の詩の第四句の「秋疑冒雨菊新開」(秋に雨を冒して菊の新たに開けたるかと思ふ)という表現である。

従来、この句に関しては、川口久雄校注『菅家文章』等には、中国側の詩は引かれていないようであるが、おそらく次に引く詩を踏まえた表現といえることができるであろう。

『皇甫冉詩集』巻下 (上海古籍出版社、影印明銅活字唐五十家詩集)

《秋日東郊作》

閒看_レ秋水心無事、臥對_レ寒松手自栽。

廬嶽高僧留_レ偈別、茅山道士寄_レ書來。

燕知_レ社日辭_レ巢去、菊爲_レ重陽冒_レ雨開。

淺薄將_レ何稱_レ獻納、臨_レ岐終日自遲廻。

この詩は、『中興閑氣集』『又文集』『文苑英華』『三體詩』『唐詩品彙』にも収められており、日本のものでは『文鏡秘府論』に引かれ、第五・第六句は『千載佳句』『倭漢朗詠集』にも引かれている。すなわち、道真の詩と「重陽」に「菊」が「雨を冒して開く」という点で共通していることに気づく。実は、次に引くように、道真の義父にあたる島田忠臣の詩にも類似的表現がある。

『田氏家集』巻下 (内外書籍、新校羣書類從)

《重陽日侍_レ宴、同賦「黃菊殘花欲_レ待_レ誰、應_レ製」

「黃衿侍_レ宴恩多_レ澤、應_レ似_レ菊花冒_レ雨開。」

従来、道真の詩には、白居易や元稹の詩の影響が強いことが指摘されてきたが、本稿で見えてきたように、その他にも、かなり色々なものを見て、その影響を受けているように思われる。そういうことも考慮に入れて彼の作品を見ていくことが、今後の道真の作品研究の課題となるかと思われる。

注

(一) 杵尾武先生著『玉造小町壯衰書の研究・本文注釋索引篇』(臨川書

店、三十七頁）の本文に「顔色美艷之姿、相「同花鰾開」露之咲。」と見え、すでに、注に『白氏文集』卷十二「簡簡吟」を引いておられる。

(二) 岩波日本古典文学大系、六八九頁に「文集にこれに似た発想の詩がある、「好看落日斜銜処」「竹霧曉籠銜嶺月」(和漢朗詠集卷上、秋、霧(本大系本「七三」「三四一」)など。」と見える。

(三) 『増補・平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇・第二冊―』「道真の詩に於ける白氏文集詩語・詩句の攝取例」(芸林舎、三五一頁)として、『白氏文集』卷十五「高亭」詩が引かれている。

(四) 本文は、国立国会図書館蔵本・内閣文庫蔵本甲乙二種・松平文庫蔵本(いずれも近世写本)を参照して定めた。

(五) 滝沢貞夫氏によれば、『永久四年百首』には、『千載佳句』の影響があるという(岩波書店、『日本古典文学大辞典』の『永久四年百首』の条)。

(六) 明治二十年九月六日の「めざまし新聞」に載せる江東散士(齋藤緑雨)の作品。平成六年度成城国文学会夏季大会における池田一彦氏の講演「齋藤緑雨をめぐる」の資料より借載。

(七) 小島憲之監修『田氏家集注・巻之下』(和泉書院、一九九四年、三七一頁)において、村田正博氏が皇甫冉の『秋日東郊作』を『和漢朗詠集』(九日)から引いているのはさすがというべきであろう。なお、『學生字典』(陸爾奎・方毅編、黄烈修訂、商務印書館)の「冒」字の条に「犯也。謂「勇往無所顧忌」。如「冒險」「冒雨之類。」とある。花が気象の悪条件を冒して開くという先例は、『玉臺新詠箋注』卷七・簡文帝「傷別離」「寒沙逐風起、春花犯雪開。」などがある。

(八) 他にも、たとえば、『太平記』卷十二「大内裏造営事附聖廟御事」にも引く「菅家後集」『詠樂天北窓三友詩』の「口不能言眼中血」の句は、管見に入った注釈書類に指摘がないようであるが、おそらく、『史記』卷一二七「日者列傳」「悵然嚔口不能言」を踏まえ

た表現であろう。

(補記) 平成六年度成城国文学会夏季大会の折に、御来聴くださった亀井孝先生から、道真の『江上晚秋』詩の「山銜落日分陰駐。水趁渦年一種流。」について、前句は「馬」、後句は「船」を連想させるものがあるのではなからうか、との御示教をいただいた。

(成城大学大学院博士課程後期修了)